

「アルコール依存症発症前、飲酒、発症、脱却に向けて」過程の変遷推移 —生活状況、行動、内面感情、ニーズ、支援の視点から—

○ リカバリハウスいちご 佐古 恵利子 (007559)

寺嶋正己 (中部学院大学大学院・007959)

アルコール依存症 福祉サービス 回復

1. 研究目的

わが国におけるアルコール問題への政策的取り組みはアルコール依存症からアルコール関連問題へと展開し、平成7年の精神保健福祉法以降現在では、医療・保健・教育の領域に福祉サービスが累積され包括的支援が目指されるようになってきている。このような動きの中にあって本研究では、社会福祉の視点からアルコール依存を巡る福祉サービスの共通の基盤について、とりわけ社会復帰支援・地域生活支援における役割を探る。

2. 研究の視点および方法

アルコール依存症者の社会復帰及び地域生活を推進する「リカバリハウスいちご」は、1999年以来社会参加促進のための福祉サービスを提供してきている。本研究の視点は、当該サービス利用者がどのような回復をめざしているのか、立ち直りに向けてどのような課題と福祉サービスへの期待をもっているのか知ることにある。

研究対象は本研究の目的に同意し協力を得ることのできた「リカバリハウスいちご」利用者で、医療機関でアルコール依存症初期治療を終了している人達である。2008年10月から2009年12月までの間に8回グループインタビューを行った。初回に半構造化インタビューを用いて開始し2回目以降は前回はふりかえりながら進めた。インタビュー内容は①現在抱えている症状と問題②断酒しても前に進めなかった問題、課題③なおってきたこととなっていないこと④何からの回復か⑤回復の課題とした。

分析はグループインタビューの内容を録音し逐語録を作成して分析した。データを切片化し、コーディングし、カテゴライズした。

3. 倫理的配慮

研究依頼は、メンバー及びスタッフに、書面及び口頭で行い、研究目的と趣旨、研究内容を説明し、個人が特定されないように配慮することを確認し、同意を得た。

4. 研究結果

圧縮したカテゴリは『アルコール依存症発症前』『飲酒』『発症』『脱却』過程の4つの変遷推移毎に、生活実態としての『生活状況』『行動』『内面感情』に分類した。抽出概念は(表1-1 表1-2)に示した。多くの人達が発症前からアルコール家庭、虐待、生活困窮等の抑圧的な生活状況下で、早い自立や歪みのある行動をし、生きるのが苦しいと感じていた、それが飲酒経験によって楽になったと感じられ、その後、酒が生きる支えと

なったことがうかがえる。病気の進行により問題は身体的・精神的・社会的な側面を持ち、どの側面の問題も別の他の側面の問題をひきおこし、また他の側面の影響を受けて悪循環し多重の問題を抱えていくことになる。脱却にむけて、治療と自助グループを必要とし断酒生活を軌道にのせていくことにある。断酒生活が始まって、飲酒前から抱えてきたネガティブな感情や行動特性は回復していないままで、どう生きたらいいのかわからなくなっている。内面感情をみつめなおしトラウマから回復し、病気の結果抱えた多重問題を一つ一つ整理していかなければならない、肯定感につながる規則正しい生活、社会的な役割を身につけていくには集団の中での学びが必要。最低生活が保障され、飲まない仲間や相談者がいる、人との交流がある、地域でできる仕事がある、自分の思いが言える、回復をめざす生活の中で自らのニーズと課題がわかるようになり、酒を必要としなくなる生き方を構築していく。以上が脱却にむけて回復の課題としてあげられたものである。

(表1-1) 【発症過程の推移】

	【 依存症発症前 】	【 飲酒 】	【 発症 】
『生活状況』	1 抑圧環境・出来事	4 酒と生活が引き合う	8 生活の悪循環
『行動』	2 歪みをもった行動	5 早い時期からの飲酒	9 飲酒優先の生活
		6 酒に逃げることを覚える	10 対処が尽きる
『内面感情』	3 生きるのが苦しい	7 「酒が楽にしてくれる」経験	11 否定的思考 12 飲酒欲求葛藤

(表1-2) 【脱却に向けた過程の問題と課題】

『生活状況』	13 飲まない環境 14 仲間や相談者の存在 15 回復の場の存在 16 最低生活保障 17 居場所 18 対人交流 19 断酒環境下での仕事 20 自分の思いが言える環境
『行動』	21 アルコール依存症治療 22 自助グループ継続 23 習慣を変える 24 日々断酒努力 25 規則的な生活 25 多重問題の整理 27 集団の中で学ぶ 28 生活バランスとりながら働く 29 社会的な役割を果たす
『内面感情』	30 病気の自覚 31 断酒優先の選択 32 生活の回復 33 否定的思考のみなおし 34 発症以前のトラウマ 35 自分の生きていき方がみつけれられない 36 自分のニーズがわかる 37 肯定感

5. 考 察

本研究結果から、依存症発症前の段階では、生理的・安全・社会欲求である生きる上での基本的な欲求が満たされていない状態がみられる。社会支援が届かず飲酒によって、心の危機的状況に対して自己対処することを覚え、発症し生活の崩壊過程を経験している。健康状態を害し社会関係を損ね悪循環して、多重の問題を抱え、否定的で孤立している。

依存症者からの回復には、まず断酒生活の構築が重要なこととなるが、医療・保健・教育領域との連携をはかりながら、ネガティブな状態からの脱却、これまでにかかえてきた問題を整理していきながら、仲間と社会の中で生きていく新たな生活スタイルの獲得をサポートする、社会福祉におけるサービスがその役割として期待されている。